

飛身長目

通巻182号 平成31年1月1日発行

歴史の方向「開頭」昭和28年1月号 通巻66号
絶大なる平衡化への営み

森信三

悠久なる人類の歴史を顧みても、今日ほどその大多数者が苦悩している時代は、全く空前といふべきであろうか。しからばそれは何故であろうか。もちろんこれを端的に国際関係の現実面より言えば、米ソという二大勢力を両極として、世界そのものが二分せられており、しかもそれが何時爆発するやも知れず、その上万一爆発せんか、一弾よく百万前後の精霊を殺傷するという原爆水爆を中心とする人類の半殲滅戦となることが必定だからである。

このように端的に現実面から言ってしまうえば、一応それまでのこととも言えるが、しかし問題を単にこのような国際的現実の表層からのみ見るにとどめず、それを背後から支えている思想的側面からも考えるべき事は、改めて言うを要しないであろう。何となれば問題を上述のように単に国際的現実の表層のみから考えれば、全て all or nothing であつて、どうせ「成るようには成らぬのだから」という単なる諦めに墮する危険があり、随つて一切の思索と努力とが喪失せられることとなる。

なるほど世の中のこととは、結局「成るようには成らぬ」とも言えるであろう。ことにその立場が個人を超越し、さらには国家や民族をも超える世界史そのもの

の進行に関する場合には、この「成るようには成らぬ」という言葉の持つ真理性も、決して無下には却けかねるものがある。而してこの事は世界史そのものが、必ずしも人類の理性の指示する通りには進まず、理性をその背後から支える業縁にまつわりつかれて、常に幾迂曲を描きつつ進行していることを思えば、その感入なるものがある。

一 かくして彼の「世界史は神曲なり」という世界観のおそらくは、最終的帰結とも言ふべき真理性に対しても、時々「それは結局、成るようには成らぬ」ということではないか」との反問を受けること少なくない。洵に人類の歴史的進行は、理性の明示する直線行路をとらずして、常にジグザグ的なる迂曲の道をたどり、そこにはいわゆる試行錯誤的現象が、単なる個人の立場を超えてまさに人類の規模において行われつつあると言わねばならぬ。しかもこの場合人類は未だ「人類的主体」の代行者を持つに至っていないために、試行の事実があつても、その十全なる自覚はない。即それが試行であつたとはいへ、事後に至つて初めて知られることであつて、事前にこれを覚知するには至つていない。而して如是の現象的現実の最深の根因は結局人類の負える業縁によるものであり、而してかくの如き業縁の最現実的には、端的に畢竟この一箇肉体にあるという外あるまい。

ネットで 森信三先生と修身教授録 と検索

的な立場より言えば、人類が自らの理性的力によつて、その根基をなしているところの肉体的限定のうちに居りながら、しかもどれほどその制約を支配し超出して行き得るかとの過程というを得るであらう。而して人類の歴史そのものが、ただ如是の真理を如実に実証しつつあると言へるであらう。

二

かくしてここに改めて問題となることは、人類歴史の究竟的理想如何という大問題である。然り洵に大問題であつて、この問題はおよそ人類にとつて最大至高の問題と云うべく、しかもまたそれは、その性質上最要必至の大問題であつて、いやしくも人間たる以上何人もこれを把握している必要のある大問題といつて良い。

ところでこの大問題は通常宗教にあつては大体彼岸の世界として表象せられてきた。仏教の浄土極樂、キリスト教における天国等の概念は、何れも如是の表象の概念化と言つて差し支えない。すなわち人類はその究竟的理想境をユートピアとして描く以外に、まず彼岸的投影において把握したのである。かくしてこれらの宗教的な彼岸的理想界は、それが人類の希求して止まない理想社会たる点においてユートピア思想と共通しながら、その實在領域を彼岸に見んとするにおいて、地に現れたユートピア思想とは、全く天地懸隔するものがあると言つてよい。ただしこの相違は、人類がその理想の実現

をこの地上に求めることを断念するか否かの岐れ目だからである。

しかるに人々は従来この点に関する注意が意外にも少なかつたと言ふべきではあるまいか。けだし人類の理想史上、ユートピア思想が出現したということは、人類がその理想社会の実現を、単なる彼岸的想念に満足しないで、この地上の現実として実現せんとする希求を發するに至つたことを証するものだからである。かくしてユートピア思想の出現は、その文献がいかにほどの程度にいわゆる宗教批判を含むと否とにかかわらず、少なくともその内含する本質的意味においては、地上に出現した最初の宗教批判といふべきであらう。

まことに宗教は人類救済の第一次的役割を演じたことは確かであるが、しかし人類の救済が完成されるためには、この第一次的救済の契機となる宗教そのものに對する批判を契機とするでなければならぬ。なんとすれば宗教はこれまで自らの絶対性を僭してきたが、しかしそのいわゆる絶対性は個人主体の觀念性を全奪し得なかつたからである。確かに宗教はその主觀態においては絶対的の一面がある事は否定し得ないが、同時にその個人的主觀態において相對的側面の存することも看過してはならない。かく言えば、いわゆる仏教徒の多くは大乗仏教におけるいわゆる佛国土の建設を説き、またいわゆるキリスト教徒に神の国の地上的實現を説くであらう。しかも注意を要する事は、このような主張が現実の歴史的進

行とともに、よくその実現の歩みを進めてきたといひ得るであらうか。不幸にして私はこれに對して安易には肯定的言辭を吐き得ないものである。

三

そもそも人類の歴史上、反宗教的な意味を持つ思想が、これまでに三度出現したと考えられる。而してその第一はダウインの進化論であり、第二は諸々の社会的ユートピア思想であり、而してその第三はいわゆるマルクス主義である。ところでそのうち第一の進化論における反宗教性に、人類の始原を動物に求めて、直接神に求めなかつた点にある。すなわちそれは聖書の創世紀に於ける記述との正面衝突を意味し、随つて進化論こそはおそらく人類の生める最初の反宗教的思想といふべきであらう。近時マルクス主義の盛行とともに、マルクスとダウインとの關係を問題とする論文の現れるのも決して偶然ではない。

しかしながら進化論を以て人類史上最初に出現した反宗教思想することは、必ずしもダーウイン自身が反宗教的な人間であつたと断定する訳ではない。ダーウイン自身が個人的には果たして反宗教的であつたか否かを決定するには、幾多の資料に基づく精到なる研究を要する事柄であつて、今はもとより如是の領域に立ち入る事は出来ない。ただここで、問題とするのは彼の学説の意味するものが個人的に彼が宗教信仰を持つてると否にかかわらず、少なくともオーソドック

スなるキリスト教信仰とはその結果において相反するものだということであり、その意味で彼の学説は意識すると否にかかわらず、宗教批判の先駆的役割を演じていることを言わんとする迄である。現在にあつては篤信のカソリック信者のうちにも進化論を否定していない人々が少なくないようであるが、しかしかくの如きは進化論を媒介とするキリスト教解釈の展開であつて、決して吾人の如上の説を覆すものではない。

四

しかしながら進化論からユートピア思想へはそこに大いなる発展の存する事は言うまでもない。けだし進化論を以て動物より人間への進化を説くものとするれば、ユートピア思想は、人類の歴史上、初めてその究竟的理想の地上の実現の夢を説くものだからである。かくユートピア思想は人類の究竟的思想の構造的投影ではあるが、しかしそれは天国のや極楽が彼岸的投影であつたのと異なり現実のこの地上への投影である。しかもそれは単なる構想的投影たるにとどまつて現実の現実性を持つものではなかつた。

では一步を進めてなぜユートピア思想は現実的実現性を持つに至らなかつたであらうか。そこには種々の理由が考えられるであらうが、そのうち最も根本的なものは、そこに「現実への批判」が欠如していたためであらう。すなわちの社会組織に対する批判の全欠である。かくして如是の厳しき現実の批判の立

場に立つて理想社会を構想し、その実現に努力せんとしつつあるものこそ即マルキシズムであつて、ここに共産主義とユートピア思想との根本的相違があるといふべきである。すなわちユートピア思想も共産主義も、人類がその私有財産を放棄する社会を以て究竟的理想社会と考へてゐる点では共通するが、しかもそれに至る段階として、現在の社会組織に対する批判の有無に両者を分かつ根本的分水嶺があると云つてよい。

五

以上を大観して明らかに言い得ることは、人類の歴史はその理想郷の実現を彼岸的投影から此岸たるこの地上の実現へと転じ来たつたということ、ならばにその理想とするところは、この地上の一切苦患の除去ではあるが、しかもその第一着手を、まず貧富の差の平衡化への努力に求めつつあるということである。このことはいわゆる私有財産の廃棄がユートピア思想ならばマルキシズムにおいて共に共通眼目をなしている点にうかがえる。

もちろん人類の地場的苦患が、財の平衡化によつて直ちに全面的に解消するとは考えられぬが、しかし人類の苦患の一半がそれによつて軽減せられるであらう事は疑いを容れない。従つて人類の苦患が単に経済的平等のみによつて皆消せざるの故を以て共産主義思想の志向する眞理性を否定するがときは「歴史の方向」を考へる事なき個的主観の臆見にすぎな

い。ただ問題は如是の経済的平等化への努力が他の半面において自由への抑圧となり得る可能性の多分に存する点である。これこそ実に人類が現在当面せんとしつつある眞の難問題といふべく、人類は今後この難問を解くべく恐らくはその全知能を絞らねばならぬであらう。しかしながら人類の歴史は直線的進行をなしえないで常に迂曲を描いて進み来たつた点を顧みるならば、この難問に關しても、歴史はおそらく端的直截なる直線的進行の大道を打通し得ないであらうことが予見せられる。

されば山は低くなるともより高くはならず、谷は浅くなるともより深くはならぬように、人類の歴史を大観するとき結局は「絶大なる平衡化」へ向かつて進行しつつあるもののごとくである。それが人智よりみて可なりや否やを越えて世界史の示向する方向は厳としてこの方向を示しているかに思われる。而して此の「絶大なる平衡化」は単に物的財的側面のみではなく、さらに心的側面をも結局は含意するかに思われるが、この点に關する論究は、それ自身独立の論考を要する大問題であつて、ここにはそれに立ち入る余裕はない。

森信三先生の歴史観を拝し感慨深し。人類は「絶大なる平衡化の道」を歩んでいくとの論説は理解できるし、富の平等化も理解は容易だ。現実には共産主義国家は世界に数える程だし、どちらかというとならば資本主義国家が裕福と言へる。目下中国は経済的には資本主義体制であらう。ただ政治体制は

大量破壊兵器と世界（微言）

森 信三

完全な？独裁国家の道を歩み、一握りの権力が国家の命運を左右できる。これに対し民主主義国家は国の舵取りには膨大な時間が必要である。一旦緩急あれば、起ち上がりにおいては独裁国家、あるいは共産主義国家が先行できるだろう。今世界はかつての米ソ冷戦に代わって米中がその主役である。世界の構図はさほど変化はないかに見える。世界は一步前進二歩後退で進んでいるのだろうか？国連の機能も完全ではなく、よたよたしながら何となくその存在が続いているもの、いつ何時その箍（たが）が外れるか分からぬ。（二繁）

ここに1993年を迎えるにあたり、まず考えられる事は、この1953年という年が、我々人類にとつては誠に容易ならぬ不気味な年であるということである。

○ではなぜ不気味であるかというに、この二、三年前、一時米ソ関係の険しかった頃、最も危険だとせられたのが外ならぬこの1953年だったという事は、今日なお人々の記憶に新たなることである。

○ところで幸いにして、米ソ間の雲行きは、その後多少の緩和の傾向が見え、表面的には、ここ当分の間は激突発火の危険はなさそうに見える。これは全人類のために洵に無上の幸いというべきである。○しかしながらこの平静が果たしてどの程度の確実性と持続性を保ちうるかという事になると、願望と希求の立場をカツコに入れて、冷厳なる現実そのもの

立場に立つこととなると、何人といえども全く保し難いことであろう。

○さらに昨秋11月1日の新聞紙は、米国がいよいよ水爆の実験を、エニウエトクにおいて実施したことを報じている。それによると水爆の破壊力は大体15万平方キロメートルにおよび、一弾よく約150万から300万の人命を奪う可能性があるという。実に恐るべしとも何とも、全く人類の今日までに使用してきたいかなる形容辞を以てしても、その損害の程度を表現することは不可能である。

○しかも水爆の脅威はそれだけには留まらない。さらにはいかなる小国といえども、わずかに十数発の水爆を保持することによって、人類世界の破壊が可能だということに至つては、全く言うべき言葉がない。

○吾人が前月の「微言」でアインシュタイン博士について述べた事は、人によつてはやや酷に失すと思われた向きもあるかと思うが、しかし如上原爆より水爆への展開を考える時、その最初の発条を引いた人間の一人として、アインシュタイン博士の罪責は、永遠に人類史上から消えないであろう。

○同時に原爆にせよ水爆にせよ、その最初の製作国がアメリカであり、また原爆に関して、その最初の使用者もまたアメリカであるという事実も、同様に……：：：否前記ア博士の場合以上に、人類史上に特記せられるべきは言うまでもない。

○同時にまた、今更のことならねど、原爆の最初の被害者が、我ら日本民族であったということも、等しく人類史上永遠

に不滅のことに属する。

○同時にかく考え来たつて、帰結せられる事は、我らの民族の今後とるべき態度としては、結局再軍備否定という外ない気がするようになってきた。しかしながらこのことは、現実的には個人としても、はたまた民族としても、実に容易ならぬ重大決意を要することを思わねばならぬ。1953年に入る年頭の思索は、まずこの決意の内容がいかなるものであるかを、あらゆる面から徹底的に衝き止めてみることであろう。

（「開頭」昭和28年1月号 通巻66号）

あとがきに替えて

65年前の森信三先生の世界観は、現代でも通用しよう。遅々として情勢は変化せず、同じ局面が続いていて、人類の進歩は果たしてあるのかないのか、何人にも確かにあるとも、無いとも断じ難いだろう。日本は森信三先生のお考えと異なり、再軍備して今日がある。もはやこれを覆すことは困難だろう。日本に革命が起きるような予見は皆目できないだろう。政府は憲法を改正して、「普通の国」を目指している。すなわち外交の後ろ盾を確かなものにしておかないと、国家間の話がまともにできないからである。愚生はこの方向は正しいと思う。

（27日二繁）

〒633-0003
桜井市朝倉台東2-538-89
電話 0744-4513422
E-mail: hji3@ken.jp
http://web1.ken.jp/syushn